

## 金沢さんへのお詫び

—高田さんと学習院—

小倉 芳彦

小倉 ごぶさたしています。お訣れしてからももう四年になりますね。冥界での暮らしはいかがですか？

金沢 いやア、なかなか過ごしやすいですよ。昔の知り合いもいっぱいいるしね。

小倉 相変わらず談論風発でしょうね。

金沢 ところで史学科の皆さんはお元気ですか？

小倉 金沢さんの三か月後に末松先生が亡くなりました。九二年四月です。

金沢 そうですか。柳田さんはどうしておられますか？

小倉 節子姫はその年の三月に定年で退職されましたが、今も元気にお宅で仕事をされています。時々研究会や会合にもお出かけになっているようです。

金沢 高田君はどうしている？

小倉 この九六年の三月で高田さんも定年退職なんですよ。それをお知らせしようと思つて、今日は金沢さんを呼び出したのです。

金沢 そうかあ。高田君とはよくテニスをやったものだ。四方温泉のテニス合宿には二人とも欠かさず参加したね。今も相変わらずやってるだろうね。

小倉 テニスこそ我が生き甲斐！ 腰を痛めた、なんて言いながらも、テニスクラブの帝王気取りのようですよ。私も昔テニスのお相手をしたことがあります。高田さんのはバックライン後方からロングを打つばかりで、こっちはおもしろくない。そこで逸って打ち込むと失敗する。高田さんのは「負けない」テニスだ、と口惜しまぎれに言ったものです。

金沢 高田君が学習院に戻って来てくれた時はうれしかったなあ。昭和三十年代に男子高等科で同僚だった。中国文学科の卒論に、マルセル・グラネの翻訳をやったそうで、その論文原稿を見せてもらったこともある。大変な学力の人だよ。それから東京女子大へ行ったが、さらに東大に移ったのは「紛争」の後だったのだろうか？

小倉 女子大の「紛争」では相当に苦労したらしい。「燃焼し尽した」なんて言ったのを聞いたことがあります。東大は、藤堂明保教授が当局に抗議して辞職した空席に迎えられたようです。

金沢 東大在職は短かかったわけだね。

小倉 一年間いて、二年目に入ったあたりで辞めなくなったようです。夏休みだったと思うが、突然我が家に訪ねて見えて、「自分は東大にいたくない」と心情を吐露された。ちょうど前年度に学習院で中国文学の先生が定年で退職して、後任候補の心当たりを探す役を私が命じられていた。そこで高田さんをはじめ中国文学関係の人にあちこち意見をきいていたんですが、意外にも相談相手の高田さん自身から「自分ではどうだ」と言って来られたのです。

金沢 東大を途中でやめるなんてタダゴトじゃない。

小倉 そうです。しかし学習院の方も中国語の教育についても見識のある有力な人物を必要としていた。だから私

は高田さんに「一年やそこらで辞めるのは友人としては反対だが、学校の立場で言えば、あなたのような大物を学習院は歓迎するだろう」と言ったおぼえがあります。

金沢 そんなことがあったの。君は一度も話したことがないね。

小倉 相手が冥界の金沢さんだから話してるんですよ。高田さんからそんな話を受けたものだから、私はびっくりして、このことを当時の日文学部長を通じて学長の耳にまで入れた。「東大相手の大きな人になりますか、乗りますか？」と念を押したところ、やってみてよいという感触でした。

金沢 東大の反応はどうだった？

小倉 秋に入って高田さんは中文のM主任教授に辞意を申し出た。M教授の自宅まで行くのに、私は頼まれて門前まで付き添ってあげました。「友人」としては複雑な気持ちでした。その場で主任教授の諒承が得られたということ、日文学部長がきちきち東大のS文学部長に割愛の折衝に行ってくれました。

金沢 東大を途中で退職して私大へ行った先例はないんじゃないか？

小倉 ええ、先例はたった一つしかなかったらしい。日文学部長は学習院で新設予定の研究所の所長になってもらうという受入条件を示して、ようやく先方の諒承を得られたそうです。

金沢 なるほど。

小倉 ところが思わぬところで学内に難問が生じました。

金沢 ？

小倉 前年退職した中国文学担当教授の後任としてのポストには問題がなかったのですが、その教授が所属していた学科が高田さんの受け入れを渋ったのです。

金沢 どうして？

小倉 よくわかりません。要するに高田さんの人柄について十分な情報がなかったせいではないでしょうか。なかなか結論が出ないので日文学部長は苦慮しました。教員はどこかの学科に所属することになっていましたからね。

金沢 そんな事情ちっとも知らなかった。

小倉 そうでしょう。これはその件で動いていた私と、文学部長と、そして学長しか関知しないことでしたからね。つまり史学科とは全く関係のない人事だった。金沢さんはそのとき史学科主任でしたね。

金沢 そう。ああそうか、それで突然日学部長から「高田さんを史学科で引き受けてくれませんか」と話を持ちかけられわけか。僕はあっさり「史学科でお世話しましょう」と答えたよ。むかし高等科で同僚だった誼みがあったからね。

小倉 そう、あくまで史学科の正規のメンバーではない、史学科が窓口になってお預かりする、という約束だったはずです。なかなかわかりにくい話ですけど。

金沢 同じ研究室で顔を合わせているのに、時々高田君を分け隔てする人がいるのに、僕は憤慨したこともあったが———そうか、そういう事情を二十年以上も話さないなんて、きみも水臭いゾ。

小倉 すみません。金沢さんがお嫌いなスジの話になってしまいました。でもやはりこういうことがあったと、高田さんが退職される機会に金沢さんにはお話しておきたい。間もなく私も退職して、前後の事情がわからなくなってしまうかもしれませんからね。

金沢 今さらそんな話を聞かされても仕方がない。組織上のことはいろいろ面倒なこともあるだろうが、ぼくはあくまで高田君を史学科の一員と思っっているからね。

小倉 わかりました。高田さん自身も史学科を御自分の拠り所として信頼して下さっていたのですから有り難いことです。つまらぬことをお話して、また金沢さんに「おこられた」ようですね。お詫びします。では今日のところは、これで通信を打ち切ります。またそのうち呼び出しますので、それまでゆっくりお休み下さい。

金沢 高田によろしく言っといて下さい。

(一九九五年九月)

訃報

安田 元久 元学習院大学長

史学科草創期の昭和三十八年以来二十六年間にわたり、日本中世史の講義・演習を担当され、昭和六十年より平成元年まで学習院大学長をつとめられた安田元久先生が、去る平成八年一月二十三日早朝、御逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。